分に批判を加へ訂正してやるやうにしたら、生徒の想像力、判斷力を働かせることが出來て、試驗前の詰込勉强をさせるよりも歷史教授の効力が多いことゝ信ずる。このやうな政治教育の材料としては、西洋近世史が最も適してゐる。近世の國史について政治上の利弊を論ずることは忌避せねばならぬことが往々あるが、西洋のことなら斟酌も入らず、公平の判斷も出來るものである。外國史教材の捨てがたい所は亦この點にも存ずる。ギリシヤ、ローマの歷史の如きも亦政治教育の好材料である。教授の時間の餘裕さへあらば教へたがよからう。

サー・井ルリヤム・テムプル

(Sir William Temple)

文學博士　内田銀藏

サー・キルリヤム・テムプル Sir William Temple

といふ名の人は二人ありて、其の一人は西暦一五五五年(我が弘治元年)に生れ、一六二七年(我が寛永四年)に歿し、他の一人は西暦一六二八年(我が寛永五年)に生れ、一六九九年(我が元祿十二年)に歿せり。この二人の關係を見るに、正に第一のサー・キルリヤム・テムプルが歿せし翌年に第二のサー・キルリヤムは生れし事にして、もし此の二人を混じて同一人と見るに於ては、恰もサー・キルリヤム・テムプルは百四十五年の長壽を保ちしかの如く思はるべし。更に面白きは第一のキルリヤム・テムプルは數へ年七十三歲、第二のキルリヤム・テムプルは同じく七十二歲の生を享け、大体に於て同じ位の壽命の人なり。而して第二のキルリヤム・テムプルは實に第一のキルリヤムの孫に當れり。

第一のサー・キルリヤム・テムプルも相當に其の名を知られたる人にて、ダブリンのトリニティ

ー・カレージ Trinity College の學長 provost として功績ありしことなるが、彼れの孫なる第二のヰルリヤム・テムプルは更に有名にして、政治家・外交家・思想家・文學者として知られ、特に外交史上著名の人なり。而して予が今言はんとするは專ら第二のヰルリヤムに關してなり。

先年予英國に滯在中、偶々此の人の全集を求め得て、其の或る部分を讀み、頗る感興を覺ゑ、何時か、更に十分精讀する機會もがなと思ひ居りしも其の折を得ず打過ぎしが、最近に至り漸く前よりは少しく精密に彼れの著述の或るものを閲覽することを得たり。依つて主として其の中なる二三の記事に就きて述ぶる所あらんとす。

先づ順序として彼れの經歷及性格に就き簡單に一言し置くべし。彼れは西暦一六二八年、倫敦にて生れたり、即ち其の生年は我が寛永五年にして支那に於ては明末崇禎元年に當る。父は Sir John Temple と云ひて アイルランドの記錄局長 Master of the Rolls の職を奉せり。彼れは其の長子にして、一六四四年數へ年にて十七歳の時ケムブリッヂ大學に入學せしが、別に學位を求むる事をせずして、一六四八年數へ年二十一歳にして佛蘭西に行けり。其の後は或はパリに或はマドリッドに、或は佛蘭西のサン・マーロ St. Malo に或は白耳義のブリュクゼルに滯在したりき。その初め佛國に赴く途中、彼れはサー・ピーター・オスボーン Sir Peter Osborne 及其の子息幷にサー・ピーターの娘ドローシー Dorothy と邂逅したり。アイル・オフ・ワイト Isle of Wight の旅舍に於てオスボーンの子息が窓硝子に書きし文句官憲の忌諱に觸れ、其の一行捕へられて糺されし時に、娘ドローシーは、健氣にも彼女の兄弟のなせし行爲を以て、自分の爲せし事なりと申立て、其の結果一行の者皆咎を受くる事なくして釋放せ

られき。若きヰルリヤムはドローシーの此の行動に深く感じ、それより愛着の念を起し、ドローシーもヰルリヤムを慕うて相思の仲となりけるが、両人の結婚は支障ありて容易に整はざりき。かくて両人は七ケ年を過ごせしが、其の間にドローシーは痘瘡に罹り、美しかりける彼の女の顏面に痘痕を生じたるも、しかもヰルリヤムの愛情は爲めに些かの變化も來さず、終に両人の結婚は首尾能く相整ふ事となれり。ドローシー即ちテムプル夫人は婦德ありて氣立やさしく、温良にして、しかも非常の場合に臨みては沈勇ありき。夫のために内助の功頗る多かりしといふ。此のテムプル夫人のことは、マコーレーの「サー・ヰルリヤム・テムプル傳評論」(もと一八三八年十月の『エディンバラ、レヴユー』に掲載せられたるもの)にも詳叙しありて、人口に噲炙する所なり。(Edinburgh Review Vol. LXVIII. p. 123 et seq.)。

テムプルは一六五五年に結婚してアイルランドに歸り、爾後數年書を讀み、特に史學と哲學とを研鑽し、また詩を作り、園藝を樂しみしが、やがてアイルランドの國會議員となり、次で一六六三年にはイングランドに移りシーン Sheen に居を定む。Sheen とは「うつくしき」の義にして、風光明媚を以て知られたるリッチモンド Richmond の舊名なり。テムプルには一人の妹あり、其の名をMarthaといふ。是より先き一六六二年四月 Sir Thomas Giffard に嫁せしが、婚嫁後僅かに一ケ月にして夫を喪へり、こゝに於て Lady Giffard 即ち Martha は、此の夏シーンに來り、テムプル夫妻と居を同じくせり。其の頃テムプルはまた果樹の栽培などして園藝の趣味を養へるものゝ如し。

然れども彼れは長く閑散の境遇に滿足せざりき。彼れは出でゝ外交官たらんとの希望を抱け

り。一六六五年六月にテムプルは或る重要なる使命を帶びて獨逸なるミユンスター Münster の僧正の許へ派遣せらる、是れ外交家としてテムプルの經歷の始めなり。此の手始めの折衝は、つまり不結果なりしかど、テムプルの人物・手腕は信賴せられて彼れは間もなく其の年の十月にブリユクゼル駐在の使節に任命せられたり。是れ彼れが特に望みし位置なりき。一六六七年にテムプルはアムステルダム及デン・ハーハに赴き、ジョン・ド・ウイツト John de Witt と會商する所あり。次で一六六八年の一月を以て神速に所謂 Triple Alliance を締結することを得たり。是れ誠實を以て外交上の成功を博したる顯著なる一例なりとす。其の以後テムプルの外交家としての閲歷は今短き時間にては一々述ぶること能はず、またそれを述ぶるは此の講演の目的に非ざれば暫く省略に附すべし。

テムプルは人格の人なり。一定の主義主張を有し、出所進退を苟もせず、志行はるれば出でゝ働き、行はれざれば退いて隱るゝといふ如き人物なりき。當時人情輕薄、政界腐敗の際に於て珍らしき高潔清廉の士なりしと稱せらる。彼れは外交のみならず、後には內政にも多少與りしことありしが、內政は其の得意の舞臺にては非ざりき。彼れ初め Triple Alliance 締結の後、一六六八年の八月より一六七〇年に至る迄、和蘭駐劄の英國大使としてデン・ハーハに在り、次で又一六七四年より一六七九年迄大使として和蘭に駐在し、和蘭との親善に力を盡し、また和蘭の國情を觀察し調査する十分の機會を得たり。其の著 "Observations upon the United Provinces of the Netherlands" は一六七二年の作にて、即ち閑散なりし中間の時期に於ける著述の中に屬す。又彼れが William of Orange と Mary との結婚を首尾能く成就せしめた

るは第二回目の和蘭駐在間のことなり。一六八〇年、數へ年にて五十三歳の時にサリ Surrey のフアーナム Farnham 附近に地を購ひ、和蘭風の庭園を設け、かくて出來上りたる別業を Moor Park と號し、爾後茲に隱栖して園藝に耽り、又文筆に親みて、悠々餘生を送れり。Swift が此のムアー・パーク莊に來りて寄住し、テムプルの文事を助けたるは一六八九年よりの事なり。かくてテムプルは晩年幾多の著述を爲し、終に一六九九年一月廿七日午前一時を以て歿す、(夫人は是れより先き一六九五年一月に逝けり)。以上をテムプルの經歷の大略とす。

テムプルの全集は前後幾多の版あり。予の藏本は一八一四年ロンドン刊行の四冊本なり。(以下引用する所皆此の本に據る)。今それを見るに、其の中には "An essay on the original and nature of government" あり、"Observations upon the United Provinces of the Netherlands" あり、"Letters" あり、"Memoirs" あり、また "An essay upon ancient and modern learning" あり、此等は何れも皆それ〴〵有名なるものなれども、予は今日は此等に就きては述べざるべし。予が今是れより述べんと欲する所は、主として其の雜著中、"Of heroic Virtue" 及 "Of gardening" と題するもの幷に "An essay upon the cure of the gout by moxa" 等に關してなりとす。

"Of heroic Virtue" は「武勇論」とでも譯すべき歟。六節より成る。全集第三冊三一三—四〇五頁に之を載す。冒頭先づ彼れは凡べての自然の賦與または人爲の改善の中に就きて "divine" と呼ぶべく、殊にすぐれたるもの二つあり、一は Heroic Virtue にして他は "Poetry" なりと說く。之を東洋の思想に對比すれば、"Poetry" は "Heroic Virtue" の「武」に對して「文」を表するものゝ如く

にも思はる。"Poetry" のことは、テムプル別に "Of poetry" に於て之を論じ、本篇に於ては專ら "Heroic Virtue" に就いて說けるなり。彼れ古今の歷史を該博に引證して說き去り說き來り、其の結論に於ては、(一)征服は概して北より南に向つて進めり、サラセン人の場合は例外なり、(二)寡は概して衆に勝てりといひ、何故に北人强きかに就いては、氣候及土地の關係より北人の體格偉大、體質强健なるに由るとし、(一)何故に寡は能く衆に勝ちしかといふことに就いては、敗北は先づ陣容崩れて逃走始まるに由る、多數と雖素質よからず結合十分ならざる軍隊は却て素質優秀にして、能く統率せられ結合十分なる少數の軍隊の爲めに敗らるゝと爲す。勝利を得、征服を仕遂ぐるには三つのものを要す、第一兵士を擇ぶこと、第二軍紀を嚴にすること、第三忠君愛國、名譽の念、宗敎心等により死を恐れざるの精神を養ふこと是れなりと。テムプルが、寡は概して衆に勝つといひ、又軍器の精粗、財力の多少等に說き及ばざりしは、彼れが未だ今日の如き大規模の作戰を豫想せず、また最近實現せられたる如き軍器の發達進步、及現代の戰爭の場合に於ける如き莫大なる費を豫期せざりしが故ならん。最後に彼れは善政は善戰に優るとし、"And if, among the ancients, some men have been esteemed heroes, by the brave atchievements of great conquests and victories, it has been by the wise institution of laws and government, that others have been honoured and adored as gods." と結ぶ。以上は「武勇論」の歸結の要領なり。

全體として「武勇論」は頗る興味あり、また多く思考の材料を與ふべき讀物なるが、其の中特に予が感興を惹きたるは、其の第二節 Section II に見はれたる支那論なりとす。テムプルは事理を深く

考ふると共にまた廣く世界の隔遠なる地方の事迄も注意して研究したる人なり。彼れは本論第一節の終りに於て古來歐洲人の熟知せる地域以外に尙ほ廣大なる地域存し、それ等の隔遠なる地域に於てまた善美なる制度風俗及大征服の事蹟等あることを云ひ、其の例として極東に支那あり、遠西にペリユー Peru あり、北にサイシア又はタータリー Scythia or Tartary あり、南にアラビヤ Arabia ありと說き、而して第二節の初めに於て支那のこと、孔子及孔子敎のことを頗る委しく敍說したり。西曆第十七世紀の英國外交家が如何に支那を觀じ、孔子及孔子敎に就き說を爲したる乎。其の說の精粗當否は暫く措き、彼れの所論は長く東洋の學者に多大の興味あるものたるべきや疑を容れず。

思ふにテムプルはマルコ、ポーロの旅行記及明末淸初に支那に來りし耶蘇會士、其の他の西洋人の著譯を讀み之に由つて支那の事情、其の古來よりの歷史及び孔子の敎を知りしならむ。[三] 彼れが「武勇論」を書きし精密なる年月は予未だ之を詳にせず、然れども「武勇論」は一六九二年開板の『雜著』"Miscellanea" 第二輯中に收載せられたるものにして、而して一六九二年は正に淸の康熙三十一年(我が元祿五年)に當れり。今其の支那に關して記する所の二三を擧ぐれば、曰く支那には、百四十五の大都會 (capital cities) 千三百二十一の小都會 (lesser cities) あり、人民多く、農業開け、產物夥しく、運河、河川等の便申分なく、國內貿易の盛大なる事、此の國の如きは、他に比類なし、他國に於ては國民は通例貴族と平民とに區別せらるれども、支那に於ては學者 Learned と無學者 Illiterate とに分たる。前者は治者たる官人又は他日官人となるべきものを含み、後者は被治者たる一般の人民なりと。彼れはそれより支那の

學問のことを敘し、孔子の書は、主として倫理の敎にして、道義を說き、修身齊家よりして殊に治國平天下を致す所以を講ずることを述べ、("The sum of his writings seem to be a body of digestion of ethics, that is, of all moral virtues, either personal, œconomical, civil or political; and framed for the institution and conduct of men's selves, their families, and their governments, but chiefly of the last.") また孔子の說く所要するに人の世に處する道、及國を治むるの道を敎ふるに外ならずとし、("In short, the whole scope of all Confucius has writ seems aimed only at teaching men to live well, and to govern well; how parents, masters, and magistrates should rule, and how children, servants, and subjects should obey.") 而して左の如き論評を下せり。

"All this, with the many particular rules and

instructions, for either personal, œconomical, or political wisdom and virtue, is discoursed by him, with great compass of knowledge, excellence of sense, reach of wit, and illustrated with elegance of style, and aptness of similitudes and examples, as may be easily conceived by any that can allow for the lameness and shortness of translations out of language and manners of writing infinitely differing from ours. So as the man appears to have been of a very extraordinary genius, of mighty learning, admirable virtue, excellent nature, a true patriot of his country, and lover of mankind." (Works, Vol. III. p. 334.)。

右の如く孔子を讃歎したる後、更に支那の政治を稱揚し、如何にも完全無缺なるが如く說けり。彼れ曰く、

"It were endless to enumerate all the excellent orders of this State, which seem contrived by a reach of sense and wisdom, beyond what we meet with in any other government of the world. (ib. p. 340.)

また曰く、

"Upon these foundations and institutions, by such methods and orders, the kingdom of China seems to be framed and policed with the utmost force and reach of human wisdom, reason and contrivance; and in practice to excel the very speculations of other men, and those imaginary schemes of the European wits, the institutions of Xenophon, the republic of Plato, the Utopias, or Oceanas, of our modern writers." (ib. p. 342.)

即ちテムプルは希臘の昔よりこのかた、プラトーを始めとして幾多の學者思想家が腦裡に描き出だせる想像的の理想國よりも、更に一層勝れて理想的なる狀態が支那に於て實現せられたりとなせるなり。見るべし其の如何に支那に憧憬せしかを。蓋し人は一方に於て自己の國を最も良き國と考ふる傾あると同時に、他方に於てはまた最も隔遠なる所に理想國を索めんとするものなり。後者は是れ遠きを尊み、近きを卑むことの一の塲合なり。且つ隔遠なる地方のことは善惡美醜共に實際よりは頗る誇張して傳へられ易く、之を聞くものまた動もすれば輕信に陷り易し。故に支那もテムプルによつて實際よりは遙に理想的なりと考へられしものならむ。夫れは兎もあれテムプルは外交家、政治家として名ありし人なるのみならず、文豪としても知られ、其の著述は頗る世に行はれたることなれば、西暦第十七世紀の末より第十八世紀に亘り、西洋に於て此のテムプル雜著中なる「武勇

論」を讀み、それよりして支那に憧憬し、孔子を欽仰せるものも、定めてこれありしことならむ。

予は次ぎにテムプルが灸治を試みしことを簡單に述ぶべし。灸治のことはテムプルの論著中「健康及長生論」"Of Health and long Life" にも之に言ひ及べる所あれど（全集第三冊二九七頁、三〇七—三〇八頁）、專らそれに就きて述べたるものは、"An Essay upon the Cure of the Gout by Moxa" 即ち「もぐさを用ひて痛風を治するの說」（全集第三冊二四六—二七三頁）なりとす。是れは初めに "Nimeguen, June 18, 1677." とあり、文中にも "here at Nimeguen" の語あれば（全集第三冊二六七頁）、西曆一六七七年即ち我が延寶五年に和蘭のニメーゲンにて書きたるものと見ゆ。ニメーゲンには有名なる國際會議あり、テムプルも和蘭駐在の英國大使として之に參する爲め、前後屢彼の地に赴きしなり。彼れ曰く、予去年（一六七六年）二月の末頃、デン・ハーハに在りて或る夜、食事の折、俄かに右足に痛みを覺え、終夜苦みしが、是れ痛風に罹れるなり。時正に予は命を奉じて條約を議せんが爲めに速にニメーゲンに赴かざるべからざる折なりき。偶々ズリシエム氏 Monsieur Zulichem 來りて予の病を聞き、予に語るに印度にて行はるゝ「もぐさ」Moxa 療法の事を以てし、又バタヴヤ在住蘭人の書ける蘭文の「もぐさ」療法書あることを告ぐ。予其の書を得て之を讀み、また該著者の子息 Utrecht に住し「もぐさ」を賣るとのことなるより、其の子息の許へ予が家に居りし獨逸醫者 Doctor Theodore Coledy を遣して「もぐさ」を求め、また其の用法につきての傳授を受けしめ、之を患部に試みしに、頗る効驗ありて痛みを感ぜざるに至れり。其の後九月の末頃痛風また左足に起りしが、これも「もぐさ」に由つて輕快したり。今年三月の末頃再び右足に

痛みを覺ゆ、今回もまた灸治して快癒し以て當六月に至れり云々。是れテムプルが自己の灸治の經驗に就きて記する所の大要なり。(原文頗る長し、今茲には只其の要を摘みたるなり)。彼れ最初灸を點ぜしときのことを叙して曰く、

"For the pain of the burning itself, the first time, it is sharp, so that a man be allowed to complain; I resolved I would not, but that I would count to a certain number, as the best measure how long it lasted. I told sixscore and four, as fast as I could; and when the fire of the Moxa was out, all pain of burning was over. The second time was not near so sharp as the first, and the third a great deal less than the second."(Works, Vol. III. p. 261).

熱いと云はずジッとこらへて、火の消ゆる迄一二三四と出來る丈早く數へ、百二十四回に至つて止めりといふなど面白く讀まる。テムプルの「もぐさ」療法に關する記事には尙ほ種々注意すべきことあれども、今は暫く是れだけに致し置くべし。また「もぐさ」といふ語の語原のこと、「もぐさ」療法の源流、其の西洋への傳播のことなどに就きては研究者別に其の人あらん。予の今企て及ばざる所なり。

最後にテムプルの「園藝論」"Of Gardening" のことを一言して此の講演を終らんとす。「園藝論」は全集第三冊二〇二—二四五頁に之を載せ、委しくは、"Upon the Gardens of Epicurus; or, of Gardening, in the year 1685." と題す。本篇中先づ予の注意を惹きしものの一は、彼れが北國の庭園と南國の庭園との差異を說ける事なり。彼れ曰く、

"In our north-west climates, our gardens are very different from what they were

in Greece and Italy, and from what they are now in those regions in Spain or the southern parts of France. And as most general customs in countries grow from the different nature of climate, soils, or situations, and from the necessities or industry they impose, so do these. In the warmer regions, fruits and flowers of the best sorts are so common and of so easy production, that they grow in fields, and are not worth the cost of inclosing, or the care of more than ordinary cultivating. On the other side, the great pleasures of those climates are coolness of air, and whatever looks cool even to the eyes, and relieves them from the unpleasant sight of dusty streets, or parched fields. This makes the gardens of those countries to be chiefly valued by largeness of extent (which

gives greater play and openness of air) by shades of trees, by frequency of living streams or fountains, by perspectives, by statues, and by pillars and obelisks of stone scattered up and down, which all conspire to make any place look fresh and cool. On the contrary, the more northern climates, as they suffer little by heat, make little provision against it, and are careless of shade, and seldom curious in fountains. Good statues are in the reach of few men, and common ones are generally and justly despised or neglected. But no sorts of good fruits or flowers, being natives of the climates, or usual among us (nor indeed the best sort of plants, herbs,sallads for our kitchen gardens themselves) and the best fruits, not ripening without the advantage of walls and

palisadoes, by reflexion of the faint heat we receive from the sun, our gardens are made of smaller compass, seldom exceeding four, six, or eight acres; inclosed with walls, and laid out in a manner wholly for advantage of fruits, flowers, and the product of kitchen gardens in all sorts of herbs, sallads, plants, and legumes for the common use of tables.

These are usually the gardens of England and Holland, as the first sort are those of Italy, and were so of old. In the more temperate parts of France, and in Brabant (where I take gardening to be at its greatest height), they are composed of both sorts, the extent more spacious than ours; part laid out for flowers, others for fruits; some standards, some against walls or palisadoes, some for forest trees, and groves for shade, some parts wild, some exact; and fountains much in request among them." (Works, Vol, III, pp. 224—225).

文稍々長けれども面白ければ、割愛するに忍びず之を抄したり。予西洋に於ける園藝に就きては未だ特に取調べたることあらず、故に此のテムプルの說を評價するは予の能くする所に非ざれども少くとも一應尤もと思はるゝ所あるを覺ゆ。

兎に角テムプルは外交家、政治家、文學者たると同時に自から園藝に從事し、之に就き深き興味を有したる人なり、又外遊多年各地庭園の實際を見聞する機會も多かりしなるべく、而して彼れは何事に就きても好んで philosophize する傾あり、されば此の人にして此の說ある如何にも偶然に非ずと頷かる。

「園藝論」中にはまた支那風の造庭術と歐羅巴の造園法との比較論あり、彼れは Countess of Ped-

ford が Hertfordshire に作れるムアー・パーク Moor-Park を以て "The perfectest figure of a garden I ever saw, either at home or abroad" なりといひ、其の庭園の布置結構を細叙したる後、是れ "a pattern to the best gardens of our manner" とすべきものなることを述べ、それより一轉して併し他の方式のよき庭もあるべし、支那式のもの是れなり。歐洲式の regular なること異なりて支那式は irregular なれども、全體として見れば却て regular なるもの以上の美觀を呈すること あるべし、尤も是れは中々むづかしければ妄りに倣ふべからずと說けり、其の文左の如し。

"What I have said, of the best forms of gardens, is meant only of such as are in some sort regular; for there may be other forms wholly irregular that may, for aught I know, have more beauty than any of the others; but they

must owe it to some extraordinary dispositions of nature in the seat, or some great race of fancy or judgment in the contrivance, which may reduce many disagreeing parts into some figure, which shall yet, upon the whole, be very agreeable. Something of this I have seen in some places, but heard more of it from others who have lived much among the Chineses; a people, whose way of thinking seems to lie as wide of ours in Europe, as their country does. Among us, the beauty of building and planting is placed chiefly in some certain proportions, symmetries, or uniformities; our walks and our trees ranged so as to answer one another, and at exact distances. The Chineses scorn this way of planting, and say, a boy, that can tell an hundred, may plant walks of trees in

straight lines, and over-against one another, and to what length and extent he pleases. But their greatest reach of imagination is employed in contriving figures, where the beauty shall be great, and strike the eye, but without any order or disposition of parts that shall be commonly or easily observed: and, though we have hardly any notion of this sort of beauty, yet they have a particular word to express it, and, where they find it hit their eye at first sight, they say the *sharawadgi* is fine or is admirable, or any such expression of esteem. And whoever observes the work upon the best India gowns, or the painting upon their best screens or purcellans, will find their beauty is all of this kind (that is) without order. But I should hardly advise any of these attempts in the figure of gardens among us; they are adventures of too hard atchievement for any common hands; and, though there may be more honour if they succeed well, yet there is more dishonour if they fail, and it is twenty to one they will; whereas, in regular figures, it is hard to make any great and remarkable faults." (Works, Vol. III, pp. 237—238).

テムプルの支那庭園に關する智識は固より不十分を免れざりしならんが、彼れが夙に歐洲式と支那式とを相對照比較して両者の特質を明にせんと試みたるは注意を値すべし、抑々支那の庭園と歐洲の庭園とは其の發達の徑路に於て果して如何なる差別存せしか、若し差異存せしとせば其の差異を致せし原因は如何、また西暦第十七、八世紀に於て支那風の造庭術は歐羅巴に於ける造園法の上に如何なる影響感化を與へたる乎。是れ等のことを

明にするも、また一の興味ある研究題目たるを失はざるべし。

(一) "It is without question the nothern bodies are greater and stronger than the southern, and also more healthy and more vigorous; the reason whereof is obvious to every man's conjecture, both from the common effects of air upon appetites and digestion, and from the roughness of the soil, which forces them upon labour and hardship. Now the true original greatness of any kingdom or nation may be accounted by the number of strong and able bodies of their native subjects. This is the natural strength of government, all the rest is art, discipline, or institution." (The Works of Sir William Temple, Part. London, 1814. Vol. III, p. 400).

(二) テムプルがパウルス・ヴヱネトウス Paulus Venetus 卽ちマルコ・ポーロの旅行記幷に Martinius Kercherus 其の他の人々が支那に關し記述せるものを讀みたることは、「武勇論」中に、

"The numbers of people and of their forces, the treasures and revenues of the Crown, as well as wealth and plenty of the subjects, the magnificence of their public buildings and works, would be incredible, if they were not confirmed by the concurring testimonies of Paulus Venetus, Martinius Kercherus, with several other relations, in Italian, Portuguese, and Dutch, either by missionary Friars, or persons employed thither upon trade, or embassies upon that occasion."

の文あるによりて察せらる。(全集第三卷三四二—三四三頁)特に儒書に關してはラテイン文の譯本を參考したるもの、如く、同じく「武勇論」中に

"..... ..and the works of Confuchu, or at least a part of them, which have lately in France been printed in the Latin tongue, with a learned preface by some of the missionary Jesuits, under the title of the Works of Coufucius.'

の語あり、(同上三三二頁)。

(以上は大正五年三月二十五日京都に於ける史學研究會例會にての講演の筆記を基礎とし、之に修訂を加へたるものなり。大正六年八月三十一日記)